

第13回 **ダイワハウス コンペティション** 作品募集

テーマ

過渡期の家

今、この時を「過渡期」であると考えてみます。

過渡期とは、古いものから新しいものへと移り変わる途中の段階をいい、変化を模索する状況と言えます。社会が大きく移り変わる中で、今ある常識を疑って、もっと多様に新しいものが生まれる可能性をもつ言葉です。

では「過渡期」において、家はどのように変わのでしょうか。

あなたが今、切実に感じる問題や出来事から何の過渡期であるかを設定して、家に本当に必要なものは何か、さらには過去の歴史や生きることの根源にまで遡って、この先に希望を見いだす家を考えて下さい。

敷地は架空でもリアルでも自由です。戸建てでも戸建ての集合でも形式は問いませんが、ひとつの住宅として必要な空間を提案してください。

住宅という概念の根本に問いかけるような、まだ見ぬ住まいのあり方を期待します。

【審査委員】

審査委員長

青木 淳 (建築家 青木淳建築計画事務所 東京藝術大学客員教授)

審査委員

堀部 安嗣 (建築家 堀部安嗣建築設計事務所 京都造形芸術大学大学院教授)

平田 晃久 (建築家 平田晃久建築設計事務所 京都大学准教授)

南川 陽信 (大和ハウス工業 執行役員)

【賞金】

最優秀賞 (1点) 200万円

優秀賞 (2点) 各30万円

入選 (4点) 各10万円

(以上、1次審査通過7作品)

大和ハウス工業賞 (1点) 30万円

佳作 (10点) 各5万円

総額 380万円 ※すべて税込み

※大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。※2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金額の配分を変える場合があります。

「過渡期の家」を考える



座談会風景。左から、南川氏、堀部氏、青木氏、平田氏。

座談会参加者

青木 淳 (建築家 青木淳建築計画事務所 東京藝術大学客員教授)

堀部安嗣 (建築家 堀部安嗣建築設計事務所 京都造形芸術大学大学院教授)

平田晃久 (建築家 平田晃久建築設計事務所 京都大学准教授)

南川陽信 (大和ハウス工業 執行役員)

現在を「過渡期」として考える

南川 今回で、ダイワハウスコンペティションは第13回を迎えます。前回の第12回の課題「都市に住む快楽」では、現在の住まいの根本を疑ってかかるようなテーマにしたところ、多様で優れた案が集まりました。今回も、「住宅」を課題の土台として、前回に引き続き内容を深めていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

青木 現在の住宅に、少し閉塞感を抱いています。住まい方が大体決まっているので、新しいものが出てくるというより、洗練していく方向の住宅が多く見られます。しかし、住宅には本当はまったく異なる生活の楽しさや喜びがあると思います。そこで「過渡期」という言葉に注目しました。「過渡期」とは、古いものから新しいものへと移り変わる段階を表す言葉です。モダニズムが始まった時も「過渡期」といわれていて、もっと住まい方は多様で、もっと楽しく住むことのできる家があるのではないかと、これからの住宅が考えられていましたが、そういうものの考え方が今の時代にも必要ではないでしょうか。そこで、現在が本当に「過渡期」かどうかは分からないのですが、あえて現在を「過渡期」と考えて出発することで、人が生きることの根源的な意味と、その先の希望を見出す家を考えられないでしょうか。応募者にはそれぞれ何の「過渡期」かを設定してもらって、その中から現在の密接

な出来事や切実な思いが伝わってくるようなアイデアを見たいです。そこで今回は、「過渡期」というキーワードを挙げさせて頂きました。

暗中模索でその先を見据える

平田 「過渡期」という言葉には希望を感じます。私も学生に、今を変わり目だと考えてさまざまなことに取り組んだ方がよいといつも助言しています。現在が「過渡期」かどうか分からないけど、「過渡期」だという意識をもつことで新しいアイデアを創造することも面白いです。ただ、「過渡期の家」を「過渡期のようなもの」としてつくろうとしてもだめですね。その先にあるものを見据えながら提案することで、将来その提案を改めて見た時にそれが「過渡期のようなもの」になっているのだと思います。そういった難しさもあります。**堀部** モダニズムの始まりは、「過渡期」というよりは何か新しいことの始まりを表す「黎明期」という言葉がふさわしいのではないかと感じていました。今回の課題では「黎明期の家」でもよいのではないのでしょうか。ただ、現代はモダニズムの始まりのように、希望に満ちたまなざしや新しいものをつくっていけば豊かになっていくという時代ではないように思います。そのような状況下で空元気に提案していてもよいのか、少し疑問に思います。あえて今、過去を振り返る、温故知新のような視点もあってもよいのではないかと思います。

青木 「黎明期」という言葉には、これから先に社会や未来がこうなっていくだろうというビジョンや、こういう社会や未来になってほしいという希望が含まれています。つまり目標が見えている状態です。一方、「過渡期」にはそういったビジョンや具体的な希望が含まれていません。現在と違うことを考えなくてはいけないという思いだけがあるのが「過渡期」です。だからこそ、「過渡期」には「黎明期」とは異なる特徴があるのではないかと思います。そのひとつが古代性です。家だったら、人間が住むこと自体を考える、物事の大元に遡って考えるということに繋がります。つまり「黎明期」のように先が見えていれば過去に戻る必要はありませんが、「過渡期」は先が見えていないからこそ現在の状況をカッコに入れてみて、未来だけでなく過去も振り返ってみることも必要になる。今回のコンペでも、新しいものをつくるということは古いものを見ることから始まる、という考えを含んだアイデアを期待したいです。

堀部 なるほど。「黎明期」は、過去は置いておいてこれからのことを見るけど、「過渡期」はそうではないということですね。そう考えるとモダニズムの始まりは「過渡期」かつ「黎明期」であったといえるのに対して、現在は「過渡期」ではあるけど「黎明期」ではありません。

青木 そうだと思います。そして、現在は現在を「過渡期」と思っていない時代でもあります。だからこそ、「過渡期」であると意識することからスタートして立脚点を探さなくてはいけないのだと思います。

平田 人は自分が取り組むことが何かに繋がるという思いを通常もちますが、繋がらなくても仕方ない。繋がる可能性があると思うものをとにかく生み出していくことが重要ですね。「過渡期」はそんな励ましになるような言葉ですね。

登録・作品提出締切

2017年9月26日(火) 消印有効

<http://www.daiwahouse.co.jp/compe/>

主催：大和ハウス工業株式会社 後援：株式会社新建築社



南川 普段はあまり使わない言葉ですが、飛躍すること、過去を振り返ることなど多様な可能性を含んだよい表現だと思います。

あなたは何を「過渡期」と考えますか？

編集部 若い方が今の時代をどうとらえているか、そのとらえ方を具体的に表現するところに難しさがありながらも、多様な家のアイデアが出そうです。審査委員のみなさんが考えるとしたら、どのようなことを提案をしますか。
堀部 個人的には今、窓が住宅において「過渡期」を迎えているのではないかと考えています。例えば、全室オーシャンビューのホテルに行っても、景色を楽しんだ直後に皆スマートフォンを見たりします。新幹線に乗っていても、誰も窓の外は見ずにパソコンやスマートフォンを操作しています。さらにはグレアなど不快な光の状態があるので、みんなブラインドを閉めてしまい、窓という存在すら見なくなってしまうています。現在の人びとはインターネットを見る画面に窓を感じていて、実体的な窓はほとんど見ていないんですね。そういうことが住宅にも起きてくるのではないのでしょうか。私も住宅には本当に実体的な窓は必要なのかどうかを考えています。そういうことをネガティブにではなく、まったく見たことのない表現や、窓はこんな風に変えられるのだというポジティブなアイデアが出てくると面白いと思います。窓に限ったことではありませんが、このように家の中のひとつの部位を取り上げて表現するのもありかなと思います。

平田 今の学生は車をもつことにほとんど興味がありません。でも私たちの時はそんなことはなく、少しは所有することに欲求があった。つまり、何かを所有すること、その人がもっているものがその人自身を表すというあり方が変わってきているということです。これまでだったらその人の個性を住宅の姿として表現できましたが、もう少しその人のいろいろな関係性を含んだ生き方を表すものとして住宅のありようを考えることもできるのではないかと思います。



南川 若い人たちの意識の変化や興味のありかは気になります。
青木 確かに新しくできた住宅を見にくと、収納が少なかったり、もっているものが少ないと感じることがよくあります。私たちの世代は生活空間と同じくらいの倉庫が必要だといわれていました。今の世代は私たちの世代とは相当違っていて、所有に対する考え方も変わってきているのでしょね。

都市や社会の変わりつつあることから住宅を考える

編集部 「過渡期」は時間軸も伴っているので、応募者のとらえ方も多様

になってくると思います。その中では前回のテーマでもポイントとなった「都市」など大きなスケールの中での住宅の変化、働く場所、子育ての場所などさまざまな状況や社会の変化を想像しながら応募者はアイデアをつくっていくのではないのでしょうか。

平田 公共建築で考えると、対象になる社会の様相が目に見えて変わっている。「過渡期」を考えやすいのですが、住宅となると難しいと思います。現在はそれぞれの見ているものがみんな違う時代になっていることは共有認識されていますが、だから1戸1戸の住宅はそれぞれの考えでつくればよいとなってしまおうと「過渡期」の話になりません。ほとんど共有できないけれど、何か共有できる可能性に向けて投げている球というのが「過渡期」なのではないのでしょうか。

青木 確かに1軒1軒そこに住む主体で住宅を考えた場合、何でもありになってしまいます。その時には住む場所を選ぶことが重要になってきますね。住む場所を選ぶということは、どういう生活をするか、どういう仕事をするか、どういう子育てをするか、ということも関係してきます。

日本では都市部にどんどん人が集まって、地方都市には人がいなくなって廃れてしまうと危惧される状況があります。一方で、現在のパソコンやITは逆を指向していて、skypeやスマートフォンを使えば人が集まらなくても仕事ができる状況が生まれつつあります。しかし、実際の生活となると子供の学校など地域のことが絡んでくるので、まだまだ住む場所は重要性をもつはずで。そういう社会の変化を見据えたくうえで、生活する家は田舎にあって、都会には仕事のための家があるなど、今までとは違う都会と田舎のあり方を考える必要があるかもしれません。あるいは1カ所ではなく数カ所に住むという住み方もあり得ると思います。社会の変化によっていろんな生活の仕方が現実的にできるようになっているので、そういうものと結びつけて建築や住宅のアイデアを提案してもよいと思います。

堀部 都市や社会を考える時に、「面」で見えていく視点と「点」で見えていく視点があると思うのですが、どちらがよいのでしょうか。

平田 完全にどちらかに偏るのは面白くないと思います。「点」だけで見えようと個別性に特化したアイデアになってしまい、巨視的に見ると均質になってしまいます。それぞれ個性がある状態が理想だと思います。その時に切り口として歴史や人が積み上げてきた風土や文化も重要になってくるのではないかなと思います。

編集部 応募してくる方の大半は20代の若い方です。その世代にとってはどんどん街が変わっていくのが当然の状況で、その世代が「過渡期」をどうとらえるのか気になりますね。

青木 そうですね。今回のキーワードとして「過渡期」という言葉を挙げたらよいと思ったのも、若い方が身近に感じていることや切実に感じていることがどの辺りにあるのかに興味があったからです。東京の郊外であれば空き家が町の中にどんどん増えていって物騒になってきている状況かもしれな



いですし、あるいは自動運転車ができることによって、動く家なんていうものもできるかもしれない、それを「過渡期」ととらえる方もいるかもしれません。何が今の時代変わりつつあるのかを考え、そこから「過渡期」を見出してアイデアをつくってほしいですね。

根源に遡る

編集部 先ほど、「過渡期」の特徴として古代性があるというお話がありました。過去を振り返るのも今回のテーマで重要なポイントになるのではないのでしょうか。

青木 そうですね。どこまで大元に戻るのかはありますが、今の生活のあり方は人類の時間で考えれば一瞬のことです。根源に戻って、農耕が始まる前の時代の住むことの幸せを考えてもよいと思います。

平田 そう考えると、所有のあり方が変わってきているという先ほどの話は、定住と狩猟採集という生活スタイルの違いともいえるのかもしれませんが、『サビエンス全史』（早川書房）では、人類は定住して農耕をすることで集団としては進化しているが、個としての幸せは低下していると書かれています。そういう話もあるので、どういうふうに個としての幸せを高めていくかという観点で見ても面白いアイデアは出てくるのではないかと思います。

青木 狩猟採集の時代は小規模のグループが無限にあって、移動しながら生活していました。現代もそのような時代に近付いているのではないのでしょうか。いろんなグループに分かれていろんなグループが集まっている群島（アーキペラゴ）的な社会といえると思います。たとえばTwitterやFacebookをやっていると、SNS上では自分と同意見の人が多くいるように感じられますが、選挙に行くと実際にはそうではなく、自分がマイノリティだったことに気づかされます。つまり自分が付き合っているのは狭い範囲で、決してマジョリティではない。でもみんなの仲間ではあるというのが現代の生活の状況で、その状況が狩猟採集の時代に近いのかもしれない。

平田 ひとつの部族に属しているわけではなく、それがオーバーレイしている状況ですね。新しい住まう場所が出てくる予感があります。

堀部 考え方やアイデアはいろいろ出てくると思うのですが、一方で建築というハードウェアがあまり意味がないととらえられてしまうのも嫌だなと思います。やはり住宅のコンペである以上、ハードウェアのアイデアの質がほしいです。

南川 そうですね。しっかりと空間に落とし込まれた案を見たいですね。

青木 ある「過渡期」があったとして、それに一体どういう空間が必要とされるかまでをセットで提案することは重要です。

平田 一方で、縛りを強くすると定型化してしまうので、条件は最小限に抑えて住宅としてあり得る姿を求めた方がユニークなアイデアが出てくるよう

な気がします。たとえば、ずっとその場所に住んで住宅を所有するとすると、子供が生まれた時などあらゆる状況を許容する最大公約数的なものにならざるを得ません。しかし、どんどん移り住んでいけるのなら子供がいる時だけの家など、今までにない住宅のかたちも見えてくるかもしれません。それには上手い設定が必要ではあります。

堀部 子供の部屋などあらゆる状況に対応するために住宅のプランが生まれ、それに対する機能や性能が生まれて、その先に建築の質が生まれてくるのだと思います。そういう難しい全体を解いた建築の質から遠のかないためには、これだけは必要である空間、それを失ってしまうと住宅とはいえないという境目の設定をしっかりとらえて提案してほしいですね。

青木 生活へのフレキシブルな対応や、子供がいる時だけといった限定された用途の生活への対応など、それらは町家と呼ばれるものが実現している生活のあり方に近い気もします。過去や根源に遡ることで、今とはまったく異なる必要な空間も出てくると思います。そういうアイデアが見てみたいですね。

編集部 さまざまな切り口で「過渡期」というとらえ方が出てきそうで、とても楽しみです。では、今回のテーマは「過渡期の家」で決定したいと思います。敷地は任意に設定してもらいますが、何を「過渡期」ととらえるのか、それに必要な空間とは何かをしっかりと表現することも求めたいと思います。

応募者に期待すること

平田 生物進化の中でもほとんどの種は変わっておらず、部分的に変わっています。変わる時に要らないものは捨て、要るものは肥大化させていく。変わっていく少数のものたちが、結果として「歴史」をつくっている。そういう賭けのようなアイデアが集まって欲しいと思います。

南川 「過渡期」という言葉はさまざまな想像を喚起してくれる魅力的な言葉だと思います。身の丈に合った楽しくなる提案を期待しています。

堀部 「過渡期」とは何かという思考を深めてもらったうえで、空間的な解決をしてほしいと思います。建築としての質が高い提案を期待しています。

青木 自分がこの課題を考えるとしたら「片隅」について考えます。昔から「片隅」に惹かれていて、それがなぜかと考えると、「片隅」は家がなかった時代からあるもので、根源的なものだと思うからです。自分が知らない時代の人は「片隅」をどう感じていたかまで遡ることで自分の中にさまざまなイメージが湧いてきて、そこから住宅の考え方が変わってくるかもしれません。ある意味歴史以前まで戻って突き詰めて考えると、何が生まれるのか。それが私が「過渡期」から考えることに求めることです。

(2017年4月25日大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)

